# 平 成 29 年 度　自 己 評 価 表

鳥取県立倉吉農業高等学校

| 中長期目標（学校ビジョン） | 農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。 |
|---|---|

| 今年度の重点目標 | | |
|---|---|---|
| | 1　基礎・基本の定着と学力の向上<br>2　基本的生活習慣の確立<br>3　地域連携と特色ある教育活動<br>4　進路意識の向上と進路保障 | 5　コミュニケーション能力の向上 |

| 年度当初 | | | | | 評価結果（最終） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 目標達成のための改善方策 |
| 1 基礎・基本の定着と学力の向上 | □全体的な基礎学力の向上と学習意欲の向上（進路・教務） | ・朝読書の取組により、徐々に落ち着いた態度で授業に取り組めるようになっているが、課題・提出物などが期限内に提出できない生徒がいる。<br>・D3の生徒は、2年生で42.6%、1年生で24.4%と、年度当初に比べ減少し、初めて目標を達成した。 | ・常に落ち着いた態度で授業に取り組み、課題・提出物が期限内に提出できる。<br>・指標として、基礎力診断テスト（1,2年生）におけるD3の生徒が50%を切り、上位層の成績が向上し、全体の学力が伸びる。 | ・授業規律の徹底を図る。<br>・各教科・科目でノート・提出物の確認を考査ごとに行い、個別指導を行う。<br>・基礎力診断テストを毎学期始めに実施し、基礎学力の定着を図りその状況を検証する。<br>・朝学習・基礎学力テストを検証し、基礎学力の定着を図り、実施方法の改善に努める。 | ・落ち着いた態度で授業に取り組める生徒が多くなった。また、始業の時間を守ろうとする姿が見られるようになってきている。<br>・各教科・科目でノート・課題提出を長期休業後や考査ごとに行い、期限内に提出できる生徒が多くなってきているものの、決まった生徒が提出できない現状もある。<br>・基礎力診断テストを夏休み明けにも実施し、長期休業中の学習課題を課すことにより、学習の継続を図った。<br>・D3の生徒の割合は、1年生で48%から39%へ、2年生については約29%を維持しており、目標とする50%未満を達成している。（4月から1月） | B | ・社会人になることを見据え、提出物をきちんと出す習慣ができるよう、教科担任だけでなく、クラス担任等と協力して指導する。<br>・基礎力診断テストを今後も年3回実施し、基礎学力の定着を図ると同時に、長期休業中の課題も検討する。<br>・朝学習、課題テストの実施状況を検証し、より効果的な学習となるよう改善を継続する。 |
| | □授業改革の取組の推進（教務） | ・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいるものの、協同学習の手法による授業改革はまだ全体のものとなっていない。 | ・全ての教科・科目で協同学習の授業実践が行われ、生徒の能動的な学びが行われている。 | ・全員で協同学習をテーマとした公開授業を行い授業改革に取り組む。<br>・学習指導委員会を中心として授業改革に取り組む。 | ・協同学習の公開授業を授業担当者全員が1回以上実施した。<br>・授業研究会は12月、2月に講師を招き、公開で行った。授業改革に取り組む教師の姿が見られた。<br>・校外の協同学習研究会に参加する教員も多かった。 | B | ・引き続き校外の協同学習研修会にも積極的に参加して研修を深め、授業改革に取り組む。<br>・指導案等を共有し、授業改革を積み上げる。 |
| | □成績上位者へのサポート体制の充実（進路） | ・3年生には、農業系大学を希望する生徒3名、看護系大学3名等、大学等への進学を希望する生徒が20数名存在する。<br>・3年生は、それぞれ個別指導を始めているものの、1，2年生については担当者が決定していない状況である。 | ・3年生、進学希望者の進路希望を実現する。<br>・1，2年生の進学希望者に対する継続的な学習指導体制が実現されている。 | ・進学特別課外等を充実させるなど上位者に対する対策を改善し、3年生を中心とした進学者への指導体制を確立する。<br>・コーディネーターを配置し、進学希望者に対する個別の指導体制を構築する。 | ・進学について、大学6名、短大3名、農業研修（農業大学校等）3名、等進学者は、23名であった。<br>・コーディネーターの指導を中心にして、進学特別課外、小論文指導、面接指導等、多くの教職員で指導を行い、進路実現に向けて取り組みを進めることができた。農業系の大学進学者は3名とすることができた。<br>・1，2年生については、大学見学等の機会を作り、進学する意義を学ぶことができた。しかし、まだコーディネーターは決定できていない。 | B | ・3年生の指導がほぼ終了した3学期中に、1月30日に実施予定の進路希望調査を踏まえ、1，2年生のコーディネーターを決定する。<br>・コーディネーターを中心にしながらも、多くの教職員の支援により進学希望者の進路実現に向けて取り組みを進めることが必要と考える。 |
| 2 基本的生活習慣の確立 | □挨拶指導の徹底と頭髪・服装規定を守る取組の推進（生徒指導） | ・分離礼がかなり浸透してきた。<br>・8割の生徒が頭髪・服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善をしている。 | ・全員が分離礼による挨拶ができている。<br>・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。服装改善の保護者への文書を昨年度21%から10%にする。 | ・清掃、授業、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。<br>・毎月の服装検査を実施し違反者への段階的・組織的な指導を行う。<br>・日常の生徒指導情報を記録・共有し、学年団での指導に役立てる。 | ・分離礼はかなり浸透してきたが、まだ指導が必要である。<br>・4～1月10回の服装検査で17.6%の生徒へ服装改善の文書を出した。昨年の21%を3．4%下回った。 | B | ・あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。<br>・情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。<br>・服装違反が累積した際の指導を徹底する。 |
| | □教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進（環境保健） | ・自己肯定感が低く、自己理解・他者理解の意識が低い場合、友人とのトラブルが発生することがある。<br>・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類され、学校生活意欲が低い生徒が見られる。 | ・自己理解やより良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。<br>・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。 | ・1年生の全員面談や職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。<br>・教育相談担当や教育相談員との生徒面談を実施する。<br>・授業方法の工夫を提案したり、校内職員研修会を実施する。<br>・職員研修やQUを活用した教師の生徒対応のスキルアップを目指す。 | ・1年生の全員面接を実施したことにより、生徒の現状把握と適切なアドバイスができた。 また、自己理解・他者理解LHRは、クラスの人間関係づくりの助けとなった。クラスアンケートの結果、「過ごしやすい場所である」と答えた生徒が増加した。<br>・教育相談員等の外部機関と連携を取り、面談を実施し、生徒の悩みを早期に解消させることができた。<br>・職員研修を予定通り実施し、支援を必要とする生徒の共通理解が進んだ。<br>・QUを活用した研修を行い各クラスの分析が深まり、クラス運営に活かすことができた。QUの結果は、学校生活意欲が1回目から高く、2回目と比較したが、ほぼ変わらなかった。 | A | ・1年生の全員面接の継続<br>・校外専門機関との連携の継続<br>・支援を必要とする生徒に対する授業方法の研修<br>・QUの実施時期を早め、年内に研修会が開催できるようにする。 |
| | □明るく活発な中での規律ある寮教育の推進（寮） | ・寮内の掃除が不十分であったり、自室の整理整頓ができない者が上級生になるほど多くなる。<br>・自習時間に教科書を眺めているだけの生徒がいる。 | ・室内のゴミ置き場の掃除が常時行き届いている。自室の本棚は整頓され、登校前には学習机の上に物が無い。<br>・定期考査や資格取得、宿題・課題が無い時は、学習プリントに取り組んでいる。 | ・これまで1年生の生活委員が行っていた部屋点検と環境委員の清掃点検を、上・下級生ペアで行うことによって、環境美化を徹底する。教員による指導や点検も継続して行う。<br>・北1ホールに学習プリントを常備し、日頃の自習時間を有効活用させる。 | ・上級生とペアになって点検を行うことで、指摘しあえる雰囲気が醸成された。しかし目に見えて掃除の成果が上がるには至っていない。<br>・就職用問題を準備したことで、進路実現に向けた取り組みのひとつとなった。しかし持続できる者は少なく、利用する生徒は固定化された。 | C | ・私物の持ち込み量を制限する共に、個別クローゼットの使用例を示す。各掃除場所に注意事項を掲示し、「見える化」を図る。<br>教員による掃除の巡回指導と点検ファイルの確認を徹底する。<br>・漢字検定など、習熟度に合わせた達成感や目標が明確な課題を設定する。 |
| 地域連携と特色ある教育活動 | □各科の特色づくりと魅力の発信（農場） | ・それぞれのコースの特徴を活かした取組をとおし、地域へ発信している。<br>・農業教育の成果をHPや報道を通じてPRしている。 | ・地域が本校に求める新たなニーズに応え、産業界を巻き込んだ取組ができている。<br>・地域住民が望む情報を発信し、地域から注目されている。 | ・地域が求めるニーズを探求するため、地域連携委員会を活用して産業界との連携を図る。<br>・農業技術の向上を図るため、教員の研修を推進する。<br>・報道機関が求める資料提供を行うとともにHPに掲載し、PRに努める。 | ・地域連携委員会から得られたアドバイスをもとに、関連会社や試験場等と連携し、取り組むことができた。<br>・知識や技術の向上を図るため、農業改良普及所、JA、先進農家などと連携を図り、多くの知見が得られた。<br>・報道機関へ季節に応じた情報を提供し、PRすることができた。 | A | ・農業技術革新にともない、教職員の専門性を深化させる。<br>・継続して、情報媒体を通じ、本校の魅力を伝えるメッセージをPRする。 |

| | 年度当初 | | | | | 評価結果（最終） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 目標達成のための改善方策 |
| 3 | 地域連携と特色ある教育活動 | □農業の6次産業化の取組の推進<br>（農場） | ・米やジビエなど、質の高い商品や新商品が産出されているが、看板商品の創出が課題である。<br>・製造記録の記入や衛生管理に努め、食品の安全対策を講じているが、緒に就いたばかりである。 | ・人気の高い商品が創出され、のうこう市場などの販売で高い人気が得られている。<br>・製造記録の記入や衛生管理に努め、鳥取県版HACCPの手法による生産管理体制を推進している。 | ・従来からの商品や開発中の商品を再検討し、集客力のある商品かどうか調査を行う。<br>・鳥取県版HACCP認定のを受けるための準備を進める。 | ・高品質の米の生産や魅力ある加工食品の開発により、集客が増加し、販売額も増大した。<br>・製造記録や衛生管理について改善するため、鳥取県版HACCP認定へ向けて準備を進めている。 | B | ・地域のニーズを探求し、集客力のある農産物や加工品の開発に努める。また、販売広告やその回数などを検証する。<br>・鳥取県版HACCPの認定を受けるため、最終調整を行う。 |
| | | □学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化<br>（教育支援） | ・学校の活動の様子を家庭、地域に情報発信しているが、十分に伝わっていない。<br>・PTA活動への参加者は近年増加傾向にあるが、まだまだ固定化している。 | ・積極的な情報発信により多くの校外の方が本校の活動に興味・関心を持つ。結果として、学校が行う行事に前年度より参加人数が増える。<br>・広報活動をとおして家庭・学校・地域の連携を一層強化し、前年度より多くの保護者がPTA活動へ参加する。 | ・報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼をしていく。<br>・HPの更新を積極的に行い、各月の行事計画の掲載、行事の様子など、本校の活動を広く校外にPRしていく。<br>・学校見学会、保護者研修会等のPTA活動に際し、役員への案内文送付を含め、広く会員への参加を呼びかける。<br>・PTA会員に対してメール配信サービス、配布物などをとおして積極的に行事への参加を促す。 | ・報道機関に積極的、迅速に情報提供し取材の依頼を行った。<br>・教育支援部が行ったHPの更新は17件であった。（全体は118件）。<br>・学校見学会、保護者研修会等のPTA活動に際し、役員への案内を確実にするため、期日前に時間の余裕をもって、郵送にて案内した。<br>・各行事、研修会へ多くの保護者の参加があった。<br>・教育支援として「まちcomiメール」を十分に活用できなかった。 | B | ・引き続き、報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行う。<br>・教育支援のHPの更新は基本的に、毎週1度以上行い、校内の出来事を更新する。<br>・PTA会員に対して各行事において、「まちcomi」メール」を活用し参加を促したい。 |
| 4 | 進路意識の向上と進路保障 | □早期からの進路意識の啓発と進路指導の充実<br>（進路） | ・昨年度、進路決定率100%を実現した。一方、進路選択の見極めが不十分な生徒が就職に苦戦した。<br>・現2，3年生にも進路希望先が未定の生徒が一定程度存在する。 | ・生徒の意志形成が早まり、就職に向けての行動がより積極的になって第1希望の就職先に内定を獲得する。<br>・計画的な準備により進路を達成し、進路決定率を100%にする。 | ・早期の定着指導、職場開拓を実施し、進路先の開拓を進める。<br>・早期の進路決定がなされるよう、引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れると同時に、進路行事、LHRなど見直しを行う。 | ・1，2年生にも進学特別課外に参加させ、大学の入試センター担当教員から大学進学の意義のお話を聞かせ、進学の意義を学ぶことができた。<br>・2年生本人・保護者に対して、12月の保護者会で今年度の求人票を閲覧できるよう取り組みを進めた。<br>・龍谷大学、鳥取大学の農学部の見学会を実施し、1，2年生に大学の施設やそこで学ぶ大学生の姿を見ることにより、具体的に大学で学ぶ意義や楽しさを理解することができる機会を設けた。 | B | ・進路行事、進路LHR等の内容や進め方を検証し、早期に進路決定することの助けとなるような取り組みへと改善を継続する。<br>・2年生について、来年度以降も12月保護者会で求人票が閲覧できるよう取り組みを進める。<br>・鳥取大学農学部等の見学を継続させる。 |
| | | □資格取得者増加に向けた取組の推進<br>（農場） | ・FFJ検定初級・中級の合格率は、一昨年の78．9%と比べ50．3%となり、大きく低迷した。<br>・難易度の高い測量士補と日本農業技術検定1級の合格者を出した。 | ・進路実現への動機となり、FFJ検定初級・中級の合格率が80%以上となる。<br>・引き続き、難易度の高い資格に挑戦し、合格者を輩出する。 | ・FFJ検定の合格率を上げるため、農業クラブや実習担任による指導体制を強化する。<br>・課外指導を実施する。<br>・資格関連図書の充実を図る。 | ・FFJ初級、中級の合格者は、それぞれ78.4%、30.9%（昨年66.4%、25.3%）であり、初級、中級合わせた合格率は59.4%（昨年50.3%）であった。合格率80%の目標に対する達成率は74.3%であった。<br>・科目外で取得する農業関係資格において、課外で指導を行った。<br>・司書の支援により、資格関連図書の蔵書数が増加した。 | B | ・学年別に見ると1年生のFFJ初級合格率は、74.3%（昨年82.3%）、2年生の初級と中級を合わせた合格率は、41.3%（昨年21.6%）を示した。2年生の合格率が全体の合格率を引き上げており、1年生への支援が必要である。<br>・中級の合格率をさらに向上させるため、それぞれのコースにおいて意義の説明を行う。また、2年生に受検の機会を増やすなど、農業クラブで検討する。 |
| | | □農業や地域を支える人材の育成<br>（農場） | ・インターンシップでは、企業や農家からの評価が高く、生徒の進路選択に役立っている。<br>・地域を支えていく人材として育っており、農業関連の進学・就職割合は42%（一昨年33.8%）を示した。 | ・2年全クラスがインターンシップを通じ、地域を支える人材として自覚している。<br>・スーパー農林水産業士（県版CAP）認証カリキュラムを推進し、生徒が意欲的に取り組んでいる。 | ・2年生対象のインターンシップでは、外部講師などを活用し、計画的に積極的に取り組む態度の育成を行う。<br>・超長期インターンシップに取り組む。<br>・6次産業化プロデューサーズ（食プロレベル1、2）取得を目指す。 | ・2年対象のインターンシップでは、地域社会の一員としての意識と態度を身に付けており、生徒の進路選択に役立っている。<br>・スーパー農林水産業士認証カリキュラムを計画通りに遂行した。その結果、スーパー農林水産業士第1号が誕生し、進路実現においても奏功した。 | A | ・生徒の希望進路と関連したインターンシップ先となるようマッチングに努める。<br>・就農教育プログラムをさらに充実させ、さらなるスーパー農林水産業士の認定を目指す。 |
| 5 | コミュニケーション能力の向上 | □生徒会活動と部活動の活性化<br>（生徒会） | ・部活動に所属している割合は95%であるが、継続して活動している生徒は約半数であり、積極的に参加している生徒と、そうでない生徒との2極化が現状である。<br>・生徒会行事の運営は生徒会執行部を中心に行事運営を行うことができるようになりつつある。 | ・部活動が年間を通じて行われ、積極的に参加する生徒も増加している。<br>・生徒会執行部が主体となり、各種生徒会行事を行うことができている。 | ・年4回部活動調査を行い、活動数を把握する。<br>・担任、顧問と連携を密にし、退部者、未加入者への声かけを実施し、積極的な参加を促す。<br>・執行部会を通じ、各生徒会行事の内容を共通理解させる。<br>・各種委員会を開催し生徒が主体となった委員会を実施する。 | ・一斉部会や部活動顧問と連携をとり、部活動への積極的参加を促したが、改善まで至らなかった。<br>・生徒会執行部を中心に、生徒の意見を吸い上げ、生徒会行事の成功に導くことができた。 | C | ・部活動に参加している生徒と、できていない生徒を顧問と連携して調査し、できていない生徒に対して、顧問、担任と協力し、指導していく。 |
| | | □人権教育の充実による相互尊重の人間関係の構築<br>（人権） | ・自尊感情の涵養が十分でないため、他者との関係を築くのが苦手な傷つきやすい生徒が少なくない。<br>・様々な活動をとおして自己表現ならびに相手の意見に傾聴する取組を行っているが、十分とは言えない。 | ・自らが社会的な存在であり、そのことに無意識である自らの現実を振り返る視点を持つようになる。<br>・お互いの人権を大切にした関係について考察し続ける力を身に付けている。 | ・クラスの特別活動をとおして、普遍的視点からの権利や人権の概念・意義・重要性についての理解を進める。<br>・人権教育LHRをとおして、様々な場面で人権を意識した行動が取れるよう、個別的視点からの具体的な人権問題の学習を行う。<br>・人権教育LHRでは「差別をしない」ということは「尊敬する」ことであることを生徒に伝える。<br>・年度当初と年度末に生徒の人権意識アンケートを実施する。 | ・学園祭の準備の過程では、スムーズにコミュニケーションを取りながら作業をしている姿が多く見られた。同時にコミュニケーションの大事さを感じている生徒も多数いたようであった。<br>・人権教育LHRでは多くのクラスで班別の話し合いを設定しておられ、生徒の話す、聞くというコミュニケーションの基本を育てる一助になったと考える。<br>・年度末にはすべての学年で人権意識アンケートを行う予定である。 | B | ・クラス活動だけでなく、すべての教育活動をとおして、普遍的視点からの権利や人権の概念・意義・重要性についての理解を進める。また、人権を守ったり主張する場合には言葉によるコミュニケーションが重要であることを伝える。<br>・引き続き、「差別をしない」ということは「関わらない」ことではなく「尊敬する」ことであることを、担任同士の共通認識として取り組んでいく。<br>・生徒アンケートを精査し、その結果を人権教育LHRにフィードバックする。 |
| | | □幼保小中学校との連携や地域とのつながりの推進<br>（農場） | ・幼保小中学校や地域との連携では、本校の双方で満足度の高い取組となっている。<br>・生徒のコミュニケーション力が向上するなど、成長の場になっている。 | ・連携対象のニーズに対応しながら、信頼関係のある取組となっている。<br>・対人関係においてコミュニケーション力や積極的な態度が育成されている。 | ・連携対象と連絡を密にし、双方にとり満足度の高い計画を立案する。<br>・対話を重視し、生徒主導で事業を実施する。 | ・様々な交流対象があるが、それぞれのニーズを把握し、連携双方で満足度の高い取り組みとなっている。<br>・手話学習、のうこう市場、学校農場の開放等に取り組むなど、生徒のコミュニケーション能力が向上し、良好な対人関係が築けている。 | A | ・活動目的や内容を精査し、新たなメニューを加えるなど改善を進めていく。 |

評価基準　A：十分達成（100%）　B：概ね達成（80%）　C：変化の兆し（60%）　D：まだ不十分（40%）　E：目標・方策の見直し（30%以下）